2013年度
地域課題の総合的探求プログラム

1年次「地域課題入門」
2年次後期「地域課題特論ＩＡ」

茨城大学 人文学部
2014年3月

人文学部［地域課題の総合的探求プログラム］について

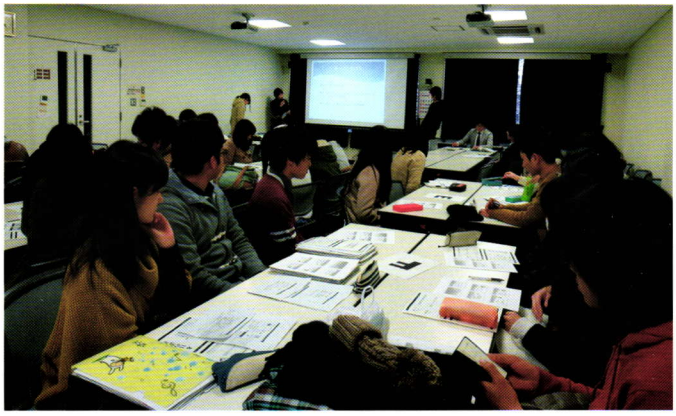
茨城大学人文学部では、2012（平成24）年度から、［地域課題の総合的探求プログラム］を設置しました。これは、各学生が、学部・学科・コース・ゼミで自らの専門分野を学ぶのと並行して受講するカリキュラムで、「専門的な知見に基づき、総合的な判断のできる地域リーダーを育てる」目的で開講するものです。このプログラムを履修する学生は、関連の科目や、自らの専門分野の科目のほかに、プログラムの必修科目として、下記の授業を受講します。

1年次　「地域課題入門」
2年次後期　「地域課題特論ＩＡ」
3年次前期　「地域課題特論ＩＩＡ」
3年次後期　「地域課題演習」
4年次前期　「地域課題研究」

2013年度には、1年次生向け「地域課題入門」と、2年次後期「地域課題特論ＩＡ」が開講され、本プログラムの1期生約30名が履修を進めています。2014年度には、1年次・2年次向け科目とともに、3年次前期・後期の科目がスタートし、2015年度に最初の「プログラム履修生」を送り出すことになります。

本プログラムの特徴は、「地域の課題に関心を持った学生たちがグループを作り、それぞれが専門に学んでいる知見を持ち寄って、その課題を総合的に探求する。地域に飛び込み、地域の人から学び、地域を動かす課題発見・解決力を身につける」ところにあります。そのため、地域の方たちに、さまざまな形でお世話になっています。

「地域課題入門」では、茨城県庁と常陸大宮市で、実習をさせていただいています。「地域課題特論ＩＡ」は、茨城県の全面的な協力のもと、県庁の職員の方たちに授業の企画をお願いし、講師をつとめていただいています。また、「地域課題特論ＩＩＡ」は、ＮＰＯや市民団体等で、地域での活動に取り組まれている市民の方たちが講師となって、学生たちを指導してくださいます。



1年次「地域課題入門」

1年次生向け「地域課題入門」は、教養科目・総合科目の集中講義として、常陸大宮市の協力の下、毎年、開講してきましたが、2012年度からは、人文学部［地域課題の総合的探求プログラム］の導入科目として位置づけられるようになり、常陸大宮市とともに、茨城県庁にも協力いただくようになりました。

2013年度は、1年次生56名、2年次生2名、4年次生2名の、計60名の学生が受講し、以下の内容で行われました。

1日目　2013年9月25日
　ガイダンス、大学での講義〔井上、兪、小原、西野〕
2日目　2013年9月26日
　茨城県庁での授業　（A～J班　60名）
3日目　2013年9月27日
　常陸大宮市での授業１（A～J班　60名）
4日目　2013年9月28日
　常陸大宮市での授業２－１（A・B・C・D・E班　30名）
5日目　2013年9月29日
　常陸大宮市での授業２－２（F・G・H・I・J班　30名）

2日目は、茨城県にお世話になり、県庁内「いばキラＴＶ」スタジオや防災センター、県警本部等の見学・研修、ならびに、本学卒業の県庁職員の方たちに講義をしていただきました。企画課、広報広聴課をはじめ、関係各部のみなさまに感謝いたします。3日目、および4日目と5日目は、常陸大宮市と茨城大学の地域連携協定に基づく「常陸大宮キャンパス」として、常陸大宮市のご協力のもとで、実施しました。3日目は、朝、常陸大宮駅前のコミュニティカフェ・バンホフを見学させていただいたあと、午前中、舞台組み立て中の、「西塩子の回り舞台」会場で説明をうかがい、舞台の板を運ぶお手伝い。お昼は、保存会のみなさまが、おいしい塩田のお米のおにぎりを振る舞ってくださいました。午後は、「常陸大宮市まちづくりネットワーク」に参加されている、各地域の団体、「盛金ＷＡＣ協議会」、「フロイデＤＡＮ」、「常陸大宮ＦＢ会」、「子育て支援ネスト」、そして、「西塩子の回り舞台保存会」の方たちが集まってくださり、常陸大宮市でのまちづくりについてお話をうかがったあと、学生たちの各班とワークショップを行いました。4日目と5日目は、学生たちが5班ずつに分かれて、常陸大宮市の伝統産業である「西の内和紙」の紙漉き体験と、伝統産業・伝統文化に関するワークショップを行いました。紙漉き職人の菊池三千春さん、常陸大宮市歴史民俗資料館の石井聖子さんにご指導をいただきました。

茨城県庁、常陸大宮市の、さまざまな方たちにお世話になりました。みなさま、本当にありがとうございました。

「地域課題入門」の授業では、「茨城県庁での授業」と「常陸大宮市での授業」を受けた後、以下の2つの課題に対して、全受講生がそれぞれレポートを執筆しました。以下にその一部を掲載します。
●レポート課題1「茨城県政の課題について」あなたは茨城県政の最大の課題を何だと考えましたか。その課題について、そう考えた理由を含め、まとめなさい。
●レポート課題2「西塩子の回り舞台(保存会)」「常陸大宮市まちづくりネットワーク」「盛金WAC協議会」「フロイデDAN」「常陸大宮FB会」「子育て支援ネスト」、そして「和紙プロジェクト」の中から1つを選び、「活動概要」、「あなたが考える今後の展開の可能性」、「あなたならどのように関わっていくか」について、書いて下さい。

レポート課題1「茨城に人を集めるには？」 1年 N.Y

今回の講義を通して、県職員の方々や、常陸大宮市の方にたくさんのお話を聞くことができ、今まで深く考えていなかった茨城県の問題や、現状などを知ることができました。茨城県は、都市に近いこともあり、若い人たちが県外に流れていく傾向が強く、高齢化が進んでいます。買い物をするにも、就職をするにも県外に行く人が多いのが現状です。また、茨城県には県外からのたくさんのひとを呼び込む場所や、イベントなどが少ないと思います。そのため、県外からの人を茨城県に滞在させることができません。そこで、私が考える茨城県の最大の課題は、「茨城県に人を集めるためにはどうすればよいか」です。

私が、茨城県に人を集めることが茨城県政の最大の課題だと考えた理由は2つあります。

一つ目は、茨城県の魅力の一つである農業の存続のためです。茨城県は農業産出額が4,097億円と全国で北海道に続き第2位についています。また、総農家数も約10万3000戸で、長野に続き第2位です。茨城県は、面積が6, 095.72㎢で全国第24位ですが、平坦であるために可住地面積は、約3,982㎢と全国4位の広さを持っています。また、茨城県には、利根川、久慈川、那珂川などの川が流れ、さらに日本で2番目に大きな霞ヶ浦があります。そのため、川・湖の沿岸部では水田地帯となって米作りが行われ、台地では、畑作、果樹栽培が盛んです。農産物の中でも、全国で第1位の産出額になるものが多くあり茨城県は全国有数の農業県だといえると思います。しかし、茨城県でも少子高齢化がすすみ、年々農家数が減り、農業に携わる人たちも高齢化してきています。農業は全国で上位に入ることができる茨城県の最大の魅力だと思います。この魅力をさらに発展させ伸ばして行くためにはたくさんの人の力が必要だと考えます。

二つ目は、茨城県の経済をさらに活性化させ、多くのひとに茨城県の魅力を知ってもらいたいからです。「茨城県は、県民の人でさえあまり茨城の魅力を言うことができないほど、インパクトのある魅力がない。」と県職員の方が言っていたことが、私にはとても印象に残りました。茨城の魅力は？と聞かれてたくさんの魅力を言うことができないので、その言葉に共感がもてました。そして、インパクトのある魅力がないことをとても残念に思いました。そこで、私は県外の方からの意見が必要だと考えました。身近にあるからこそ気づくことが難しい茨城の魅力を外の視点から見ることが大切だと思います。そのためにも、茨城に人を集める必要があると考えます。

そして、私が考えた茨城に人を集める方法は、県民を茨城に留まらせるための案と、県外の人を茨城県に呼び込む案の2つです。

まず、1つ目の県民を茨城にとどまらせるための案は、地域ごとに政策などで工夫をすることが必要だと思います。たとえば、子育て支援や、医療費の免除などです。地域ごとに行うことで、その地域に本当に必要な保障を行うことができると思います。茨城県でも、すでに小学1年生へのランドセルの支給が鹿島市で、医療費の助成制度が神栖市で行われており、このような工夫がされた政策のある地域は比較的人気のある地域になっています。このような地域ごとの政策をさらにその地域に根ざした形で進めていくことで茨城にずっと住み続けたいと思う人が増えるのではないかと思います。

また、地域の人々のつながりを強くすることが大切だと思います。例えば、地域ごとに定期的に集まる機会を作り、高齢者と子供たちのふれあいの場を設ける、フリーマーケットなどを開催し地域の活性化につながる活動を増やすこと、などです。地域の人たちどうしでつながりが生まれると、その地域のためにみんなで協力して行動する機会が生まれます。地域の活性化に住民自らが行動、協力するようになり、発展していけばそこに住み続けたいと思う人が増えると思います。

次に、県外の人を茨城に集めるためには、交通整備が必要だと思います。今回の講義でも茨城県の公共交通は年々減少しているという問題が議題にあがりました。茨城県は、自動車の保有台数が全国で4位と、公共交通よりも自動車を利用する人が多いため、公共交通の利用客が減り、減少が進んでいます。しかし、県外から茨城に人を集めるには、都内などから来る人のように、車を持っていない人でも茨城で不便に感じないようにしなくてはいけません。例えば、連休には観光地へのバスの本数を増やしたり、イベントなどへの無料送迎を行ったりすることが必要だと思います。また、電車の本数を増やすことや、料金の値下げなども今後の課題です。茨城県で公共交通がさらに発展すると、環境問題の改善につながり、茨城県民にとっても高齢者や車を持っていない人たちの役に立ちます。そのため、茨城県で、公共交通の利用を推進するイベントなどを行うのがいいのではないかと考えます。

例えば、期間を決めてバスの本数を増やし、電車の料金を下げます。さらに公共交通を利用した人には茨城県内で使える地域通貨などを支給します。また、ガソリンの値上げを行い、公共交通を利用する人が増えるようにします。このようなイベントを実験的に実施し、茨城県でどこまで公共交通を発展させるべきか考える材料にすることがいいと思います。

県外から人を集めるもうひとつの方法は、農業を生かしたイベントを若い人でも興味がわくようなものにし、私たちのような大学生などを広く集めるというものです。先にも述べたように、茨城で誇れるものの1つとして農業は欠かせないものだと思います。さらに今後も発展し続けていくようにすることが重要です。そこで、県外から来た人に、茨城の農業の良さを茨城で体感してもらうイベントが必要だと考えます。具体的には、茨城県内の地域による「B級グルメ・ご当地グルメ」のイベントを季節ごとに行い、それとともに農業体験ができるようにします。茨城県のB級グルメで若い人をひきつけ、さらに農業体験もしてもらおうというものです。季節によって旬のものの農業体験ができるようにし、B級グルメを地元の人たちといっしょに作る体験などもできれば、さらに充実したイベントになるのではないかと思います。

このような体験を通して、茨城の農業の魅力を感じてもらい、リピーターとして、今後も茨城の農作物を購入してもらう、農業の楽しさなどを知って、茨城県で農業を始める人が増えるようにするといいのではないかと思います。

今回の講義は、茨城県に若い人たちが増え、活気のある県にするために、私たち大学生に何ができるのかと大いに考えさせられました。

県庁の方や、常陸大宮の方と接することで、今、茨城県が抱えている問題をとても身近なものに感じることができたいい機会だったと思います。今後も茨城県が住みよいところになるように、私たちのできるところから努力していきたいと思います。

【参考文献】
・統計キッズ－茨城－　http://www.pref.ibaraki.jp/tokei/kids/nogyo/
・「茨城のご案内」　茨城県広報広聴課　県民情報センター

レポート課題2「回り舞台～人と人とのつながり～」 1年 K.K

私はテーマの中から「西塩子の回り舞台(保存会)」を選択した。
「西塩子の回り舞台」は江戸時代後期にはすでに存在していて、もともとは人形浄瑠璃の舞台だった。後に買芝居による歌舞伎が行われるようになった。回り舞台は、1945年秋以来組み立てが中止されていたが、1991年の調査で江戸時代後期の道具や資料を具えた貴重な文化財であることが確認され1994年に「西塩子回り舞台保存会」が結成された。さまざまな協議の後、1997年に半世紀ぶりに復活した。組み立ての際には真竹約300本を山から伐り出して来て屋根にし、1か月ほどかけて約20メートルの舞台を組んでいく。2008年には地域住民が力を合わせて伝統文化を復活させたとして、「伝統文化の華やかさと共に、地域社会の潜在能力を再認識させる極めて意義のある事業である。」との評価を受け、「第1回ティファニー財団賞　伝統文化振興賞」を受賞した。回り舞台は、原則として三年に一度、舞台の組立てと地芝居の定期公演を行っている。

茨城大学と常陸大宮市が、地域連携協定を結んでからは、学生が、本公演のお手伝いなどをしていて、2013年は、舞台開きの企画を任されるなど、大学とも協力しながら、活動を続けている。

私は、「西塩子の回り舞台」は今後大いに発展していくと考える。
現在、常陸大宮市では、「常陸大宮市まちづくりネットワーク」を中心に、市民のボランティアが協力して、地域活性化を推し進めている。
「盛金WAC協議会」は、廃校になった小学校を活用して、小中学生の合宿に利用してもらったり、地元でとれた作物を使って、うどん作りや豆腐作りの教室を開いたりしている。また、大人を対象にした草木染め教室など、たくさんの体験講座も行っている。

「フロイデDAN」は、2010年に結成されたグループである。地域の幸せ、人と人とのつながりを創り出すことを理念とし、駅前の空き店舗を改装して「コミュニティカフェ・バンホフ」をオープンさせ、地域の人の交流の場となっている。バンホフでは、通常のカフェの営業のほかに、「認知症サポーター養成講座」や「お話カフェ」を開いて、気軽に相談できる機会と場所を提供したり、「西塩子の回り舞台」や他の市民活動のグループのイベントのチラシなどを置いて、常陸大宮市の情報発信の場所として機能したりしている。

「常陸大宮市まちづくりネットワーク」では、茨城大学の学生と市民が意見交換する機会を設けて常陸大宮市の問題を確認し、まちづくりのシンポジウムや、ワークショップなども行ってきた。

茨大の学生たちは、「回り舞台」の舞台開きの際、地区の「敬老会」に協力し、地元で育てた野菜を使って、来場される方たちにお料理を提供する企画をたてている。

私はこのように、高齢者と若者が意見を交わし、何かの形で関わることが常陸大宮市の発展につながり、「回り舞台」の存続、発展などにもつながると考える。

また、「回り舞台」を発展させたい、自分の生きがいを見つけたい、というような、地域の人々のニーズを学生が仲介し、たとえば「盛金WAC協議会」「フロイデＤＡＮ」などで活動をしている方たちにつなぐこともできると思う。違う地域や世代の人の意見交換を促すことができれば、地域の新たな魅力や活気を生むことになると考える。

私は、今回の集中講義で初めて、「回り舞台」の製作に携わった。はじめは、普通の、地域のボランティアに参加するくらいの気持ちでいたが、現地で舞台の歴史を学び、「西塩子の回り舞台保存会」の活動や、組み立て作業を実際に見て、回り舞台を成功させるために多くの人が関わって、主体的に活動していることを知って、自らも積極的にこの事業に関わっていきたいと思うようになった。回り舞台の組み立てを見学に来ていた地元のおばあちゃんたちが、舞台の完成を楽しみにし、談笑されているいきいきとした姿を見られ

たことも、そう思った理由の1つである。

私は大学で、マルチイベント企画サークル「Familia」に所属している。「Familia」は多くの人やものと関わり、主体的に企画を考案・実行することで、その経験を自らが社会に出たときの糧にしようとするサークルだ。私は、このサークルが「常陸大宮市まちづくりネットワーク」に加われば、よりよいまちづくりができるのではないかと考えた。

このサークルが、常陸大宮市のボランティア団体と大学生との仲介役を果たせば、より多くの学生を「回り舞台」の活動に引き込めるし、常陸大宮市に人の流れを生むことができる。

保存会の人たちからは、舞台の有効活用の方法を模索しているとうかがった。大学には音楽サークルや大道芸サークルなど、自分たちの活動の成果を、多くの人に見てほしいと思っているサークルがたくさんある。イベント企画サークルの1人として、回り舞台の発展のためにも、自らの成長のためにも、舞台を使ったイベントを企画し、回り舞台と学生とのつながりを作ることで、今後の活動に関わっていきたいと思う。

レポート課題2「フロイデDANにみる地域活性化のかたち」 1年 S.C

私たちは今日「まちおこし」「○○市を元気に！」などといったフレーズをよく耳にする。地方分権化や少子高齢化、また、震災以降再確認されてきた故郷を大切にしようという風潮もあいまってか、全国さまざまな地域で地方活性化に向けた動きがみられているのである。

もちろん、茨城県常陸大宮市もその例外ではない。常陸大宮をさらに魅力的な所にするため、多くの方々が多種多様な活動を通じて、まちを支えているのだ。今回はその中から、「フロイデDAN」の活動に焦点を当て、常陸大宮の今後について考察していこうと思う。

「フロイデDAN」とは、常陸大宮市内の深刻な高齢化・人口の減少をうけ、平成22年に病院勤務の方々によって発足された、地域活性化プロジェクトである。はじめは「駅前保健室」というかたちで誰もが気軽に受けられる認知症サポーター養成講座を開いていたが、平成24年に駅前の元空き店舗を改修してつくられた、コミュニティ・カフェ「バンホフ」が今では活動の中心になっているという。バンホフでは、管理栄養士が考えたカフェメニューを誰でも利用しやすい価格設定で提供するほか、まちの住人のコミュニケーションのための場として貸切りサービスも行っている。市民の世代間交流を図るイベントを開催したり、常陸大宮全体で取り組んでいる「ふろしきタウン・ひたちおおみや」とのつながりから商品を常陸大宮の風呂敷で包装したりと、とにかく常陸大宮を元気にするためにさまざまな活動を行っているのだ。

医療・介護・福祉の視点から、まちづくりを考え、利用者である市民の方々だけでなく、運営側の職員にとってもリラックスできる場であるよう、活動が行われている。大切なのは同じ目線で話すこと。人と人とのつながりを生み出す場を提供しつつ、まちのことをもっと好きになってもらえるような創意工夫がなされた活動を、「フロイデDAN」はしているのだ。

今回、実際にバンホフの店舗を見学させていただき、また、「フロイデDAN」の団員の方と直接お話をさせていただくなかで、私は今後のこの活動が常陸大宮市にとって欠かせない存在になっていくと感じた。それは、「フロイデDAN」の活動が、とことん地域の人々のニーズに合わせたものであったからだ。

たとえば、これからの20年で常陸大宮の超高齢化が進むことにあわせて認知症サポーター養成講座を開いていることや、商店街の衰退を食い止めるために風呂敷でまちの魅力を直接アピールしていること。地域の課題に対し、まちの人々が直接関わるかたちで活性化をねらう、この「フロイデDAN」の活動こそが理想的なまちづくりだといえるのではないか、と私は感じた。

近年では日本の至るところで「まちおこし」なるものが行われているが、なかには地域の人々と同じ目線で向き合おうとせず、お金や、外から来る観光客のことばかりが優先で、肝心のまちの住民の意見が置き去りにされている例も少なくない。大勢のお客様をまちに呼び込むため大型ショッピングモールを誘致して、そのために地元の商店街が衰退しているようなことがあっては、それは地方活性化とは呼べないだろう。「フロイデDAN」のいいところは、地域のもの、地域の人を大切にした上で、観光客を含む多くの人を惹きつけるプロジェクトを継続的に行っているところだ。地元に住むお年寄り・主婦・若者などが気軽に立ち寄れるだけでなく、駅前のおしゃれなカフェとしても魅力をもつバンホフは、これからの常陸大宮のまちづくりに大いに役立つものであるにちがいない。

そんな素晴らしい「フロイデDAN」の今後の展開について私が期待したいのは、「認知度を上げる」ということだ。班別のワークショップの時に、「フロイデDAN」の方から「14~17時の間バンホフのお客様が少なくなってしまう」というお話をうかがった。

カフェがオープンしてまだ2年目ではあるが、バンホフがこれからも継続的にコミュニティ・カフェとして機能していくためには、まちのことを考えるのはもちろんだが、経営面でもある程度の安定が求められる。お店のクオリティを落とさず、なおかつ、地域の問題に寄り添ったプロジェクトを計画・実行していくためには、来客数を増やさなければならないのだ。よって、来客数を増やすために、「フロイデDAN」の活動を、より多くの人に知ってもらうこと、バンホフというお店の認知度を上げることが大切である。

具体的には、県内に情報を発信するため、「いばキラTV」に、たびたび出演すること（過去に出演したことがあったとうかがった）や、バンホフのHPへのリンクを、茨城大学や県、市のHPにつなげること、水郡線の電車の中や各駅にポスターを貼ることなどが考えられる。また、もっとも有効なのは、人から人へ口コミで宣伝がなされること。名物商品である「バンホフプリン」を中心にリピーターを増やすことで、まずは地元の人たちから口コミを広め、ゆくゆくは「常陸大宮の観光と合わせて、食べに行こう」という市外からのお客様を取り込むことが、またさらに、地域活性化につながっていくはずだ。

私は、この集中講義を通して、バンホフという素敵なコミュニティ・カフェの存在を知ることができてとてもよかったと思っている。そんな自分にまずできることといえば、再び常陸大宮を訪れ、バンホフをはじめ、さまざまな、まちの施設に行ってみることだ。

今まで知らなかった常陸大宮のまちづくりに触れてみて、自分も地域活性化の活動に携わってみたいと強く感じた。

まちを元気にする活動は、一年二年の短期間ですぐにできるものではない。活動を行う方々はもちろん、そのまちに生きる人々、過去に訪れたことのある人々、さまざまな人たちが継続的に関心をもち、常陸大宮を愛していくことが、さらにまちに活気を生み出していくはずだ。高齢化したまちは、近隣のまちとも手をとりあいつつ、幅広い世代がその状況を支えていけばよい。まちが活性化し、地元の人々が自分の生まれ育った地方に愛着をもって生活していけたら、きっと問題も乗り越えられると信じている。

レポート課題1「私が考える茨城県政最大の課題」 1年 F.N

私が考える茨城県政の最大の課題とは、首都圏に近いという好条件に位置しながら、他県に印象深いアピールができるポイントを持っていないために、観光業に上手く活かせていないというところだと思う。

私は福島県いわき市の出身だ。そのため、茨城県に近いところで育ってきたことから、茨城県を身近な存在に感じてきた。しかし、茨城大学に進学し、他県に進学した友人に茨城県のイメージを聞くと「特に何もない」と返されてしまい、茨城県の推しているものを紹介しようとしても、私が今住んでいる水戸の名産品である納豆くらいしかすぐに浮かんでこなかった。さらに言えば、納豆が有名なだけでは他県からの観光客は集まらない。そこで茨城県のことを地域から知っていこうと思い、今回の集中講義に参加した。そこでは多くの発見があった。

特に、今回注目して学んでいったのが常陸大宮市である。まず、私は今まで「常陸大宮」という地名も知らなかった。実際にその地へ行って見学した今回の講義のメインの一つである「西塩子の回り舞台」は私が想像していたものよりはるかに大きく、立派なものだった。昔ながらの作り方で、かつ、その道のプロの職人ではなく、地域に住む人々が、それぞれの意思と決断で造り上げる舞台であることが信じられないほどに、存在感を放っていた。

話を聞くと、組み立ての作業は、ホームページを利用して毎日発信されているという。しかし、ホームページの欠点は、ある程度その情報を知っていないと、人々が検索して「西塩子の回り舞台」のホームページにたどり着くことができないということだ。

そこで、茨城県出身の人に「西塩子の回り舞台」について知っているかと尋ねたところ、私が聞いた全員に知らないと返答されてしまった。これだけ素晴らしい技術も話題性も持っているにもかかわらず、茨城県民でさえも知らないというのは、明らかな情報発信不足だ。

地域と県の連携がうまくいっておらず、せっかくのアピールポイントを無駄にしている。常陸大宮のように、地域の高齢化が進んでしまっていると、コンピュータなどを使った情報発信は難しくなってしまう点もあるのではないかと考えられる。そういうケースでは、県がもっと「西塩子の回り舞台」を県内の注目イベントの一つとして推し出せば、興味を持った若者が県内、あるいは県外からも集まり、地域の活性化、さらには茨城県のイメージアップにも間違いなくつながるだろう。

もう一つ、私たちが体験したのが「西の内紙」の和紙作りである。茨城県の美和や山方は、全国でも数少ない、質のよい楮の産地であるということも、今回の集中講義で初めて知った。そして、和紙の生産が盛んだったこの地で、今、専門に紙漉きをされているのは二軒にまで減少してしまったということも知った。このままでは貴重な和紙作りの職人の存在も、技術の存在も危ない。和紙といえば、洋紙よりもざらざらしていて書道や障子に使うイメージしか持っていなかったが、小物や洋服などにまで、作り方次第で自由自在に作れるという話を聞いて驚いた。手で少し力を加えればすぐに破れてしまうとばかり思っていた和紙にそんな用途があることにも、それを可能にした技術も、本当にすごいと感じた。私と同じような感想をもった人が今回の集中講義を受講した学生の中にも多くいるだろう。

このように、この「地域課題入門」の集中講義を通して知ることのできた常陸大宮市だけでも、これだけインパクトのあるイベントと、全国に誇れる技術があるのだ。ただ、両方に共通して言えるのが、県と地域の連携がうまくいっていないために、茨城県全体の観光業に活かせていないということだ。

茨城県庁のホームページにアクセスする人は多いだろう。茨城県民だけでなく、県外からも多くの人がアクセスする。県のホームページから「西塩子の回り舞台」や「西の内紙」のホームページにリンクできるようにするだけでも、それらの認知度は一気に上がるだろう。同時に、その地を訪れてみたいと考える人々が増え、交通費や食費などにお金をかけることになれば、茨城県の財政にも少しずつ、貢献するはずである。

茨城県政の課題として、私があげた観光業のさらなるレベルアップを図るために、県内の地域から、つまり、内側から見た茨城県の話をしてきたが、ここからは、日本全体から見た茨城県の話をしたい。冒頭にも書いたが、茨城県は首都圏に近い地方として、観光するには大変好ましいところに位置している。しかし、茨城県は、縦に長いという点から。県南に住む人と県北に住む人の間に意識の違いが生じているようだ。県南の人々は、茨城

県よりも埼玉県や千葉県などを身近に感じやすく、茨城県民としての自覚が薄いように思われる。そこで、県は県民に対して、茨城県民であるということを誇りに思ってもらえるようなことをしていく必要がある。

県民一人一人が茨城県の名産品を知り、他県に自慢できるようなところを知ってもらうことで、変化できるのではないかと思うのだ。しかし、私が今回初めて「西塩子の回り舞台」の存在を知ったように、わたしたち若者がそのような、それぞれの地域で、一生懸命に行っている行事を知らない、体験できていない理由の一つには、公共交通機関の不便さがあるのではないか。

今回私たちが利用した水郡線は、電車が一時間に一本しか走っておらず、それを利用しようとなると、かなり時間に縛られてしまうことになる。また、電車に乗る際に、Suicaを使用することもできない。これらのことが重なると、自然と利用者も減少していく。特に学生は、経済的な余裕がないため、高い交通費を払っていろいろなところに出かけるのは、なかなかたいへんなのである。そこで、茨城県政で考えていかなければならないと思うのは、公共交通機関の利便性である。値下げをするのは容易ではないということは理解しているが、今のままでは何も変わらない。これからの茨城県を支えていく若者も、今はまだ小さい子どもたちも、自分が住んでいる県の誇れるところを知らないまま成長してしまったら、大人になった時、茨城県に残ることを選ばず、他県に移り住んでしまうという人も出てくるだろう。だから、電車、バスの値下げの検討なども必要なのではないかと考える。また、県民に茨城県のことを知ってもらう手段としては、道の駅や、ＪＲの駅などで活発にイベントなどを行い、各地域の印象を強めてもらうということもよいと思う。そのためにもやはり、テレビ局はあったほうがいいのではないだろうか。今回の集中講義で「いばキラＴＶ」を見学させていただいたが、インターネットテレビは、広い年齢層から考えると浸透するのが難しいように思える。

茨城県には、他の地域にはない魅力がたくさんある。しかし、それを上手くアピールできていないのが問題だ。県民の意識を高め、縦に長い茨城県のそれぞれの地域の名産品などの特徴を知ってもらい、他県からも多くの人が観光に訪れてくれるような茨城県をつくっていくことが、これからの茨城県政の最大の課題であると、私は考える。

レポート課題１「茨城県の医師不足」　1年　H. S

今回の「地域課題入門」の集中講義を終えて、あらためて茨城県の抱える問題について考えることができました。この集中講義を踏まえて私が考えた茨城県政の最大の課題は「医師の人員不足」だと考えました。

なぜ私が医師の人員不足が茨城県政の最大の課題だと考えたかというと、私は茨城県の県西にある筑西市に住んでいますが、以前から自宅から病院が遠いと考えていました。筑西市は面積と人口ともに茨城県でも低いほうではなく、その私が住んでいる筑西市で病院が遠いと感じるのであるから、もっと田舎の場所では、もっとそのように感じているのではないかと思ったからです。

そこで、都道府県別でみた人口10万人に対する医師の数の統計を調べてみたところ、上位で見ると京都府が272.9人と最も多く、次いで徳島県が270.1人、東京都が265.5人という結果になっており、下位でみると埼玉県が135.5人と最も少なく、次いで茨城県が146.7人、千葉県が153.5人という結果でした。

茨城県は下から2番目で、最も多かった京都府に医師数とは約1.8倍の差があり、医師の数がとても少ない県であるということが分かりました。さらに京都府の面積は47都道府県の中で31位、茨城県は24位と茨城県のほうが面積が大きいのに、医師数が京都府より少ないことから、医師数が少ないがゆえに、自宅から病院までの通院距離が長くなってしまい、私が通院が不便だと感じたことに納得がいきました。私は、茨城県の医師数が少ないことには、財政面や教育面からいくつか原因があると思いました。

私が考えた原因の一つ目は、茨城県にある大学の医学部、または医療に関係する学部の少なさです。

まず、茨城県には国立大学と私立大学を合わせて、茨城キリスト教大学、茨城県立医療大学、茨城女子短期大学、茨城大学、筑波学院大学、筑波技術大学、つくば国際大学、つくば国際短期大学、筑波大学、常磐大学、常磐短期大学の計11大学があります。その中で医学部や歯学部など医療に関係する学部がある大学は茨城キリスト教大学の看護学部、茨城県立医療大学の保健医療学部、つくば国際大学の医療保健学部、筑波大学の医学部の計4大学しかありませんでした。

私はこの結果を見て、茨城にたくさんの医師を増やすためには、茨城県にある大学が医学に力を入れ、積極的に大学生が医師になれるような教育を施すことだと考えました。他県にある大学の医学部卒業生が茨城県の医師になるのは、やはり財政面や通勤面など様々な問題があり難しいと思います。だからこそ茨城県に精通していて、高度な技術を培った茨城県の医学部の大学生を育てるために、茨城大学をはじめとする茨城県内の大学が医学に力を入れることが茨城の医師を増やすことにつながると私は考えました。

私が考えた原因の二つ目は、茨城県の予算も含めた財政の悪化だと思いました。

平成23年度と平成17年度の予算案の内訳をグラフで確認してみたところ、県税は23年度が3,066億円、17年度が3,179億円で、地方交付税は23年度が1,767億円、17年度が1,820億円で、国庫支出金は23年度が1,084年度が1,084億円、17年度が1,397億円で、県債は23年度が1,535億円、17年度が1,279億円という比較結果になりました。この結果から、県の歳入の全種類が過去のデータと比べて減っていて、さらに県の借金である県債だけは増えています。

今、日本は不況の中で国でさえもまともな対策を打てていない状況の中で、地方自治体や私たち民間ができることには限りがあります。しかしこのままでは、医療に使えるお金が増えず、医療技術の発達や医師不足などの問題が解決されず、私たち茨城県民の医療に関する不便さは解決されません。茨城県の財政の悪化を改善するために、私は、自分たちにできることは政治家に不況について真剣な意見や具体的な解決案を求めたり、茨城県の議会選挙で県民全員が本当に信頼できる議員を選んだりする、そのような草の根の活動が大切になってくると考えました。

また、茨城大学であれば学生が主体となって茨城県の財政を考える自主ゼミなどをつくり、そこで生徒同士が話し合った具体案や解決策などを茨城県庁に提出したり、茨城県庁の役員の方々を大学にお呼びして茨城県の財政問題に関する講義を頂いたりすることのよって生徒の関心を高めたりするなど、私たち学生ができることもたくさんあると私は考えました。そして、財政がよくなれば医療関係に使えるお金が増えて、高い技術知識を培った医師がたくさん育ち、茨城県の医療制度がよくなると私は考えました。

三つ目の原因は、二つ目の原因と似ていますが、茨城県の施設への投資の仕方に問題があると思いました。

茨城県には茨城空港やつくばエクスプレス、茨城港や鹿島港など、私が知る中でもさまざまな大型公共事業があります。そこでどれくらいの額が事業投資に使われているのかを調べてみると、すでに3,400億円もの金額が事業投資に使われていることがわかりました。また、その大型公共事業の中でも未だに完成しておらず、工事中の物もあることが分かりました。

このことから私は、本来議会は提出された予算の議案を私たち県民の立場から確認し、実行していくべきなのに、その役目を行使できていないと感じました。私は、確かに大型公共事業に力をいれ、茨城県を活気づかせようとするのには賛成ですが、2年半前におきた東日本大震災を受けて、まず医療関係や福祉関係に力を入れ、医師の確保や医療施設の強化や増築に力をいれるべきなのに、大型公共事業に多額の投資をするのは間違っているのではないかと思いました。だからこそ二つ目の原因でも述べましたが、私たち茨城県民が真剣に茨城県議会の議員を選ぶとともに、選ばれた議員たちは、たとえ事業に投資したとしても、その詳細を私たち茨城県民に説明するべきだと私は考えました。

以上のように述べてきましたが、現在、茨城県では、全国的に見ても圧倒的に医師の数が少なく、私たち茨城県民は通院などでとても不便を強いられています。だからこそ、茨城県議会の議員や役員たちは県民が本当に必要としていることを考えたり調査したりする。そして私たち茨城県民は自分たちの主張や声を小さくてもいいから届くような努力をして、議会と県民が一体となることが医師の確保、ましてや医療提供体制の構築や医療を提供する施設の強化につながっていくと私は考え、そうしていくことが茨城県の最大の県政だと考えました。

レポート課題２「盛金WAC協議会の可能性」　1年　I. S

＊活動概要

「盛金WAC協議会」の「WAC」とは、「Work camp Adventure education City and local change」の略である。平成15年3月に山方町立盛金小学校が閉校になった。その翌年の10月、「盛金WAC協議会」の活動がスタートした。

現在、「盛金WAC協議会」の活動は、四季折々のものとなっている。春にはハイキングの計画を立て、夏には子ども会や青少年育成のキャンプの受け入れをしたり、うどん作りや草木染、キャンプファイヤーをしたり、秋にはさまざまなものを収穫する「収穫祭」をし、冬には豆腐作りなどをしている。

これらの活動は、地元住民をはじめ、県内外を問わず参加を募っている。また、平成23年12月には、学校カフェ「まんま」をオープンした。「まんま」では、地元の食材を使ったメニューを提供している。最近では、「まんま」での大人向けの体験講座が人気のようだ。そして、今年は「西塩子の回り舞台」が行われるということで、そちらの手伝いもしている。

今年で10年目になった「盛金WAC協議会」は、現在15人のメンバーで活動している。10年目ということで、発足当時20歳だった人が現在は30歳になり、子育てなどをしているといった理由で、10年前と同じような活動が難しいという問題に直面している。

＊私が考える今後の展開の可能性

キャンプをする際に、普通の宿泊施設ならば自分たちでただキャンプをして、施設に宿泊するだけであろう。しかし、「盛金WAC協議会」にキャンプの依頼をすれば、楽しい企画を立ててもらうことができ、更に、宿泊するのは廃校なので、よりキャンプらしさを感じることができる。そのように考えると、「盛金WAC協議会」に依頼するキャンプの方が、メリットが大きいことは明白であるように思う。

このメリットを、チラシや、今、流行のツイッター、ライン等で宣伝できれば、キャンプ参加者が増えていくと思う。また、キャンプだけでなく、さまざまなイベントを開催することを利用し、キャンプ参加者に各イベントの案内を随時知らせていくことができれば、イベント参加者も増加するかもしれない。

それに加えて、常陸大宮の伝統的なものや自然等を利用したツアーを開催してはどうだろうか。都会暮らしの人々の中には、田舎に憧れを持つ人も少なくないはずである。それらの人々を対象としたツアーを開催することで、より多くの人々に、「盛金WAC協議会」の活動に興味を持ってもらうことができるのではないか。

その他に、活動の長期化に伴って生じるメンバーの年齢の問題では、若者のボランティアを募るのが良いと思う。私が所属しているサークルでは、夏に子どもを対象にキャンプを行う。そのキャンプに参加した人の中で、キャンプが楽しかったので、今度は

自分がキャンプの主催者側になって活動したいという人が、実際にいる。

このように、かつてキャンプに参加した人に、「盛金WAC協議会」の活動に関するボランティアの募集をしてみるという方法がある。もちろん、募集の対象者はそれに限る必要はない。今の若者はボランティアに参加したいという傾向が見られるため、効果は少しでも期待できるのではないかと思う。

以上のように、「盛金WAC協議会」には、この先、さまざまな可能性が広がっていると思う。

＊私ならどのように関わっていくか

上記に述べたように、私の所属するサークルでは、毎年子ども対象のキャンプを行っている。そこで、今回の講義を通して、「盛金WAC協議会」の、廃校を利用した宿泊施設で、キャンプをしたいと考えるようになった。

私のように、充実した環境の中でキャンプをしたいと思う人は少なくないと思う。更に、キャンプを通じて「盛金WAC協議会」と関わることで、その他のイベントにも参加しやすくなるはずだ。また、イベントだけでなく、「盛金WAC協議会」のボランティアへの参加も、サークルという団体単位でできるようになる。

個人では参加が難しいイベントやボランティアでも、サークルやクラブ、部活などの団体でなら、それほど抵抗感を感じることなく参加できるようになる。このように、私は、団体単位で「盛金WAC協議会」とのかかわりを重視したいと考えた。

レポート課題2「常陸大宮ＦＢ会について」　1年　A.M

【活動概要】

常陸大宮FB会とは、FB＝Facebookを通じ、常陸大宮市民が「ゆるく」つながろう、というものである。参加資格は、常陸大宮在住、勤務、出身、ゆかりがある等、常陸大宮市になんらかのつながりがあることだ。現在までに「何か面白いことを」と、鮎漁解禁に合わせた「アユステッカー」の販売や、「水郡線SLにみんなで手を振っちゃおう♪プロジェクト」が進められてきた。他にも、今回行われる「西塩子の回り舞台」をはじめとしたさまざまなイベントの支援など、常陸大宮の活性化に関わる大きな団体のひとつとして活動している。

【今後の展開の可能性】

FacebookをはじめとしたSNS利用が盛んな現在、自分の故郷や住む街にあまり興味がなくなってしまった若者世代の興味を引くのにFB会の活動は大変有意義なものだと考えられる。

Facebookの国内利用者数は2012年5月までに約900万人であると考えると、今後、FB会への参加者の増加も考えられる。利用者数の伸び率は下がってきているため、急激な増加は見込めないかもしれないが、「ゆるく」繋がる、FB会の良いところを伸ばすきっかけになるのではないかと考える。

利用者の年齢層は、主に10代後半から40代までといったところだ。学校や仕事で、一般的にいうマメな活動に携われない条件の人々が、ちょうどこの利用者の年齢層になっている。Facebookという媒体を通すことで、今までなら触れる機会が少なかった「まちづくりの一端」を「ゆるく」担うことのできるFB会は、大変魅力的であるし、今後まだまだ活動を拡げられると予想できる。

また、FB会の今までの活動を見て、「楽しむこと」に重きを置いている点でも、普段なかなか腰が上がらなかった人でも参加しやすいのではないか、と思う。何か地域のためになりたい、とは思っていても、いざ自分は何をすればよいのかと迷ってしまう人、自分にできることはないのではないかと、結局、動き出せなかった人もいるだろう。

しかし、FB会の活動を見てみるとわかるように、SLに手を振る企画で参加者のやっていることは「手を振る」ということ、「手を振ることの宣伝」だけと言っていいだろうが、結果として、水郡線や茨城、常陸大宮、そしてFB会のPRにつながっている。わずらわしいことはひとつもない。

また、「アユステッカー」や「方言手ぬぐい」も然りである。それらの商品を購入し、使用することが、まちへの寄付につながるだけでなく、常陸大宮のPR、そしてFB会のPRにつながっている。手軽かつ楽しく参加できることが、このFB会の活動拡大に大いにつなげていってくれるだろう。

【我々はどうやって関わっていくか】

まずは、Facebookを始めて、FB会に入るということだ。直接的に関わり、自らも参加していくことができる。前述したように、「ゆるく」「気軽に」参加できるというのは強みであるので、我々学生も関わることができる。

その中で、最初に自分がすべきは、自分の周囲のユーザーたちにFB会の存在を知らせるということだろう。活動をしていく中で大切なのはやはり人だろう。そのため、我々はFB会に参加し、他のユーザーにFB会の存在を知らせていくべきだ。また、その中で、Facebookだけではなく、Twitterなどの他のSNSを使った拡散をすることを積極的に行うことで、FB会を知ってもらうことができるだろう。

次の段階としては、ただ参加するだけでなくアイデアの発信をすることだ。学生の我々だからこそだから見えること、やりたいこともあるだろう。楽しく、そしてよりよい常陸大宮にするためにできる何かを考え、発信していくことができたならば、よいだろう。

最後に、もう一つ、最初のことにも関連しているが、まずは知ってもらうこと、これが大切だ。しかし、Facebook・ネットに疎い人たちは、この情報に出会わないことも考えられる。10代後半から40代くらいまでの利用者数に対し、50代以上のユーザーはやはり少数であることを考えると、Facebook内・ネット内だけで情報拡散していくだけでは、少々力不足だ。

そのため、我々は、特に高齢者やネットに疎い人々、他にも友人や家族など周囲の人間に。積極的にネット以外での媒体で知らせていく必要がある。方法としては、まずは会話として宣伝していくこと。これはどの方法より効果があるのではないだろうか。口伝いで聞いた情報は心をひくものである。また、他には、紙媒体での宣伝だ。ポスターやチラシ、身近にある紙媒体は知らないうちに我々の視覚に訴え頭の中に記憶されていることが多い。これに、「アユステッカー」のようなFB会独自のものを利用し宣伝していけるとよいと思う。

現在、私が考えられたものはこの程度だが、Facebookを拠点にしたものだからこそできる活動がたくさんあり、我々が関わる方法もたくさんあると思う。それらをより多く見つけ、自らもFB会の活動に参加していけるとよいと考えた。

2年次「地域課題特論ＩＡ」

2年次後期「地域課題特論ＩＡ」は、茨城県にご協力いただく「連携講座」として、今年度、はじめて開講されました。

特色としては、以下の点があげられます。

授業全体を、茨城県に、全面的にバックアップいただき、県の職員の方たちに、企画、授業運営、講師をつとめていただきました。

茨城県の地域特性をふまえて、「産業振興・科学技術」「イメージアップ」「県北地域の活性化」という3つのテーマを設定していただき、概論・各論・現地視察・学生の意見交換・課題発表という組み立てで行いました。

県で実務を担当されている若手・中堅の職員の方たちと、学生たちが、いっしょに講義や現地視察、意見交換を行い、受講学生たちは大いに刺激と啓発を受けました。

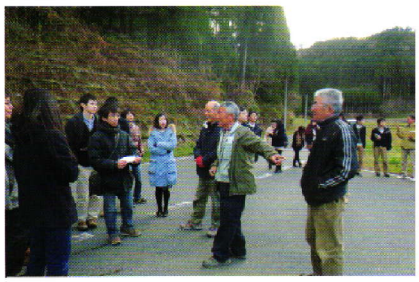
本授業のまとめとして、北茨城市楊枝方地区の現地視察後、学生たちは、6つの班それぞれに、「楊枝方地区の活性化」案をまとめ、パワーポイントを使って、発表を行いました。

各班からの提案は、以下のようなものでした。(P7～P9)

発表後、県と北茨城市の職員、茨大教員、そして学生たちから、質問やコメントが出され、意見交換を行いました。出席者による挙手投票では、C班が最も票を集めましたが、どの班の提案も、それぞれに、発展の可能性を持っているという評価もいただきました。

「地域課題特論ＩＡ」授業スケジュール

10／2（水）	ガイダンス
10／9（水）	茨城県と茨城県庁について
10／23（水）	概論　茨城県の特性と将来像
10／30（水）	県事業の事例紹介①（産業振興・科学技術）
11／13（水）	県事業の事例紹介②（イメージアップ）
11／16（土）	現地視察①・② 茨城港常陸那珂港区・茨城空港・農業生産現場（行方市）
11／20（水）	学生との意見交換①（産業振興・科学技術）
11／27（水）	学生との意見交換②（イメージアップ）
12／4（水）	県事業の事例紹介③（県北地域等の地域活性化）
12／14（土）	現地視察③　北茨城市（楊枝方）
1／15（水）	学生アイデアプレゼン（楊枝方地区の活性化）
1／22（水）	学生との意見交換
1／29（水）	まとめ



都会の小学生を田舎へ ～サマーキャンプ～

A班　川和・菅澤・小野瀬・柴田・山賀

キーコンセプト

都会の子供たちを対象にした、2 泊 3 日のサマーキャンプ(小学生の夏休み) 都会ではできないような体験、ここ(北茨城、冨士ケ丘)でしかできないような体験「また行きたい」と思ってもらえるような動機作り

日程

1 日目の朝はバスで東京駅から冨士ケ丘小学校へ。道中では茨城弁または北茨城弁講座を行う。ま た、昼食はチャーターしたバス内で各自とることになる。昼ごろに冨士ケ丘小学校着し、岡倉天心を 題材にした演劇の練習を行う。練習には茨大演劇サークルなどの演劇集団も協力し、地元の人や記念 館の職員に脚本を担当していただく。その後、木工工作などのクラフト活動を行う(材料は、あらか じめ学生ボランティアで用意)。夕食はグラウンドにて、地元の方のご協力を得た飯ごう炊飯とあんこう鍋などの地元の食材を使った料理。1 日目の締めは花火と屋上での天体観測。宿泊は、2 泊とも 教室内(改装や整備が必要)。

2 日目は地元料理の朝食後、バスで楊枝方地区へ行き自然探索を行う。昼頃にバスで学校まで戻り、 地元の海産物や野菜などでバーベキュー。その後、夜の演劇本番に向けて練習を行う。本番はボラン ティアや大工さんが作った野外特設ステージで行い、地元の方々へ披露。いばキラ TV などでも取り 扱うなどメディアの力を入れる。その後キャンプファイヤーを行い、地元の食材を使った夕食後、肝 試しを行う。肝試しは地域色を出すこととあきがこないように塩の道や炭鉱、楊枝方近辺の逸話を元 にいくつかのパターンが必要。

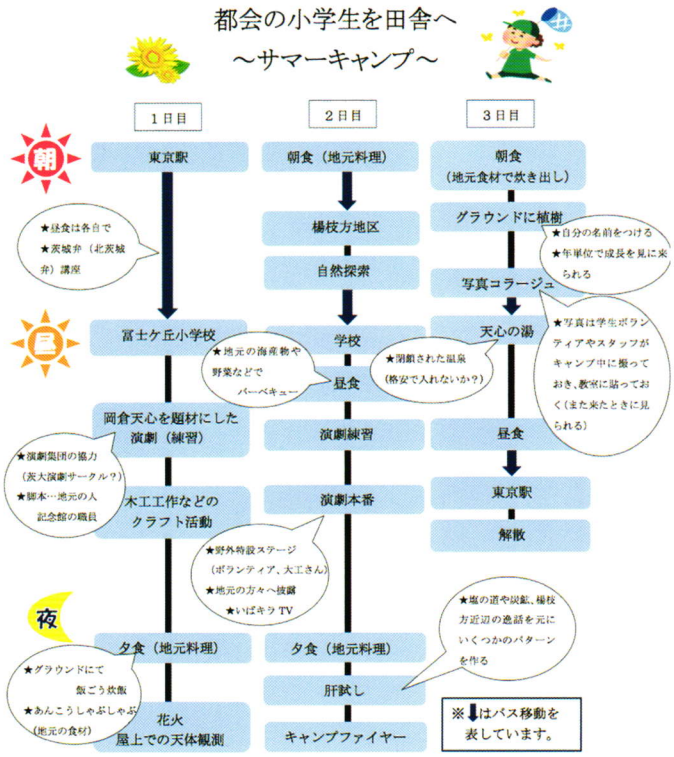
3 日目。地元の食材の炊き出しで朝食後、グラウンドに植樹を行う。これの肝は自分の名前をつけ られることと年単位で成長を見に来られること。その次は学生ボランティアがこの3日間で撮ってお いた写真を用いた写真コラージュ。教室に貼っておくことによりまた来たときに見られるようになっ ている。昼になったらバスで「天心の湯」へ。この温泉は現在閉鎖されているので、交渉しだいでは 格安で入れるようにできるかもしれない。入浴後、昼食を食べバスで東京駅へ行き、解散となる。

長期的な計画

施設を自分たちで作っていくことで、一度来ただけで終わりにくくなる。例えば、某 DASH 村の ように開拓していったり、来るたびに少しずつ便利になるように炭焼きや井戸などを作ったり、畑を 耕してつくった野菜を次回使ったりすることで達成感を感じてもらう。これにより都会の子供たちが「サマーキャンプをやるならここ!」という意識をつくっていく。

課題

学校や温泉の賃貸料や、塩の道や炭鉱、山など各地の整備費のほかに、参加費や、学生ボランティ アの確保や地元の方への人件費が問題となる。費用の削減は活動の幅を狭めることになるが、参加費 を多くしてしまうと来る人が減ってしまう。程よいバランスにするように議論の必要がある。



北茨城の活性化 アスレチック計画案

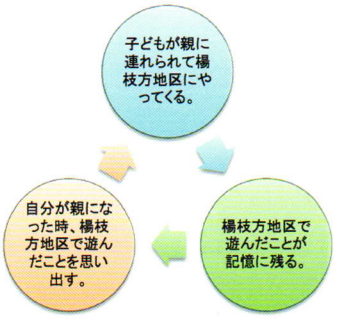
B班　雨堤・太田・高橋・清野・平岡

写真：一宮地域文化広場

なぜアスレチック?

広く残っている土地、豊かな自然の利用
⇒主に小さい子供のいる家族を誘う。安全性にも気を配 り、アスレチックで遊んだ子どもがいずれわが子を連れ てくるというサイクルを作り出す。

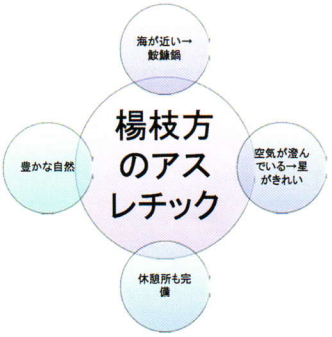
・楊枝方にたまにでも人が来てくれるだけで嬉しいのでは?
⇒アスレチックならば遊びに行く感覚で楊枝方を訪れることができる。



アスレチックである利点・特徴

・「子どもが体を動かしながら自然に触れられる」という点が特徴。自然に触れるだけの施設と差別化を図り、北茨城だけの魅力にできる。

・さまざまな北茨城市の魅力をアスレチックにプラスすることで他のアスレチック施設と差別化できる。例えば、鮟鱇鍋を食べられること、星がきれいに見えることなど。星がきれいに見えることを活かして天然のプラネタリウムとして運用することもできるのではないだろうか。(その場合、軽食をとったり夜まで待てるような休憩所をつくる)



・小さな子どもだけでなく、年上の兄弟や親、学生にも遊びに来てもらうことを考えて難易度の高いコースも用意する。→より幅広い世代・より多くの人が楊枝方地区を訪れる

・アスレチックの運営に関して、大学生をアルバイトとして雇用する。→若い世代が楊枝方地区に関心を持つ機会を作り、積極的に関わりをもてるようにする。

計画の不安要素

・子どもだけで先走ってしまい、迷子になるのでは？→迷子になった際、どこにいても親と合流できるような目印を作ったり、アスレチックの形状を迷いにくい形(一本道、円形など)に作る。(工夫すれば北茨城市のマークの形にできるのでは･･･？)

宣伝方法

・父親世代の目につくように、電車のつり広告や駅の広告で宣伝→週末に家族で出かける際の選択肢に。

・完成間近の様子をいばキラTVやNHKで取り上げてもらい、注目を集めておく→県内の認知度を上げてから、口コミや親戚の紹介などで全国へ。

・遠足の候補地として学校に紹介する→子どもから親へ伝わる。

・大学生協での案内ポスターによる宣伝→学生向け。

発表時の質問や指摘

Q.どのくらいのサイズ・規模のアスレチックを作るのか？
　⇒楊枝方地区の円形の地形を活かして、集落の形にそって複数のアスレチックを設置する。

指摘;家族で出かけるときに、行き先を決めるのは父親ではなく母親である場合も多いので、父親に向けた宣伝だけでは不十分なのでは？
　　⇒母親にも認知してもらえるような宣伝方法を考える必要がある。

北茨城市楊枝方地区の活性化

C班　福島・井上・浦井・山田・両角・溝江

地域課題特論という授業を通し、また実際に楊枝方地区へ訪れてみて、私達は様々な知識を得ることができました。特に楊枝方地区への訪問では、楊枝方地区の様々な良い点と悪い点を見つけ出すことができました。その発見から、楊枝方地区がこれから発展し、活性化していける為に様々な案を出しました。その中から特に５つの案を紹介したいと思います。

1 大運動会

富士ヶ丘地区で今まで行われて来た運動会のバージョンアップ版を行うという プランです。富士ヶ丘地区で廃校になる小学校の校庭を利用して、有効活用しま す。目的は、交流しながら地区の人々が運動することによって体力の向上を図る もので、ターゲットについては同じように過疎化で悩んでいる地域や、つくばな どの県南地域、地区外の親子、大学生で、運動を通して現地の方とのコミュニケ ーションを図り、ついでに市内を観光してもらいます。そのことによって地区の 良さを知ってもらったり、また違う季節にリピーターとして来てもらったり、別 の視点から地区を見てもらえるので新たな地域活性化のヒントを得ることができ るといったメリットがあります。

また、大人数で競技を行うことによって普段大人数でできるスポーツができな い子供たちが、皆で行うスポーツを経験できるという良い機会になります。

2 親子向け通年ツアー

ただ子供を呼ぶだけでなく、保護者となる親も巻き込むことでさらに情報が広 がっていくのではないかと考えたのがこの1年を通して行われるツアープランで す。通年で参加した人だけを対象に景品を渡すことにより、何度も足を運んでも らう事ができます。ターゲットを決め、そのターゲット層に合わせてプランを考 え直すこともできます。

春＝里山ウォーキング（ウォークラリー）←塩の道を整備してもらう
夏＝キャンプファイヤー、バーベキュー、ホタル観察←親がいるので火も安全に使える
秋＝棒ささら、彼岸花、アンコウ←名物が盛りだくさん
冬＝雪遊び、天体観測←30 cm 程積もるらしいので

メリット

・何度も足を運んでもらうため、楊枝方地区のことをより深く知ってもら える、好きになってもらえます。
・四季折々の魅力を感じてもらえます。
・参加者が日常を忘れて楽しめる場となれるため、訪れたいと思わせるこ
とができます。

3 ハイタッチキャンペーン ~日本のブータンは北茨城市楊枝方地区~

会えば、必ず挨拶をする人情味あふれる楊枝方地区。さらなる楊枝方地区活性 化のために会った瞬間「ハイタッチ!!」するのはどうでしょうか。今の世の中、人間関係、近所関係が希薄になっているとされています。そのような現代社会だ からこそ、今の人間関係を見直す必要があるのではないかと考え、このプランが
生まれました。楊枝方地区の住民だけではなく、観光客の方にもすかさず「ハイタッチ!!」
観光客の方を大事にする楊枝方を目指します。ハイタッチ効果でさらに人情味あふれる楊枝方にし、絆を大事にしていきます。
最終的には「日本のブータンは北茨城市にあったのか･･･」といわれるように、日本の幸福度ナンバーワン地区を目指します。

4 楊枝方あったかふれあい写真館

使われていない民家や小学校などを利用して住民や観光客が交流できる場を作 るというプランです。村の風景や住民の写真なども展示します。また、ハイタッ チキャンペーンで訪れた観光客と写真を撮って展示することで交流が図れると同 時に写真館の知名度もアップすることでしょう。暇なときに住民が気軽に立ち寄 れるような交流場所ができれば理想です。

5 枝方地区のホームページ作成

楊枝方地区独自のホームページを作成し、運動会やツアーなどの情報を発信す るというプランです。また、写真館にある写真(楊枝方地区の風景の写真、住民 の方の笑顔の写真、観光客と一緒に撮った写真)もアップする事もできます。作 成と更新は、高齢者の多い住民の方だけでは難しいと思うので、大学生が協力し、 できた HP は北茨城市の HP にリンクしてもらい、多くの人の目に留まるように すると閲覧数の増加が期待できると思います。

楊枝方地区の活性化

D班　石井・岡田・神永・東梅・関沢

楊枝方地区の視察をして感じた点

・山の中腹にあるため、四方が木に囲まれており、自然豊かであり、かつ景観が良い。・猪や蛍など、都会などでは見られない生物がいるらしい。・出会った地区の人たちは皆さん社交的で、なんとなく温かみを感じる。・広い庭や立派な家(古風)があり、経済的には安定しているのでは?

楊枝方地区の課題

・山の中腹にあるため、簡単に訪れられない。
・四方が木で囲まれており、日射時間が短い。
・若い方が中学二年生の女の子一人のみ。
・近くにスーパーなどの店が設置されていない。など･･･

考察

資料を見る限り、楊枝方地区の人口の減少は明らかであり、また、現地視察をしてみたと ころ、自然の豊かさの反面、交通面・生活面での不便さを感じた。そのため、これから人 口の増加・若年層を取り込む事は、ほぼ不可能であろう。そのため、ある特定(対象)の方達が訪れたくなる様な方法が適切だと考える。また、何か新 しいものを取り入れるのではなく、楊枝方地区にあるものを最大限に活用して町おこしが できることを目指すべきである。

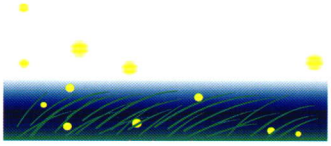
活性化策

そこで、用いるのが楊枝方地区の豊かな自然である。特に、景観の良さと、楊枝方地区 に生息しているという「ホタル」と「イノシシ」を利用してみようと考える。まず対象は、普段自然との触れ合いが少ない都会で暮らす人々・子ども。そして、美しい 自然、また周りが静かなのでゆっくりと鑑賞・撮影も出来ることを売りにして、カメラマ ンの訪れを考える。

しかし、問題となるのが「ホタル」などは他の場所にも多くあることである。そこで考えたのは、この自然を事業として用いて、特別化していく方法である。

ホタルを用いた事業

・愛媛県双海町の夕日を用いた事業を参考に、「ホタルのモニュメント」「ホタルのミュージア ム」などを作り、地区のシンボルとする。また、実際にホタル観賞を行う。豊かな自然の中で見 るホタルは美しく、子どもたちの思い出になるのではないか。



イノシシを用いた事業

・現地視察の際、猪狩りをしている方々がいらっしゃった。イノシシによる農作物の被害 があるそうだが、逆にこのイノシシを用いた事業をしてみてはどうだろうか。
(例)イノシシのレース、闘猪、ウリボーとの触れ合い広場など･･･

まとめ

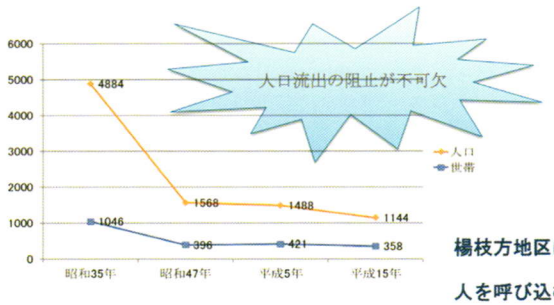
この様に、楊枝方地区にいる動物を用いた事業をすることで、地区のPRにもなる。また、この事業を成功させるには、地区の人々の協力・自然との共存が不可欠である。地区 の人々が皆で自然を守りつつ、それを事業化することで、グリーンツーリズムが可能とな る。

確かに、このようなPRのみでこの地区の活性化がうまくいくとは思わない。しかし、実行までとはいかなくても、このような取り組み自体を考えていくことこそ地域活性化へ の第１歩となるのではないか。

今回の経験を、これからの地域研究に生かしていきたいと思う。

楊枝方地区の活性化

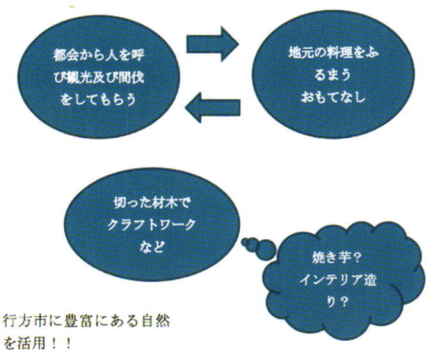
E班　星野・後藤・高柳・樋田・木内



楊枝方地区に

人を呼び込むためには？

①間伐体験



行方市に豊富にある自然を活用！！

②老人テーマパーク

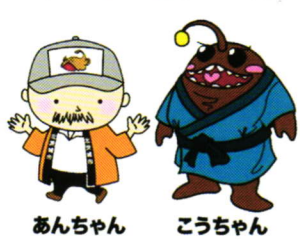
娯楽の充実
- ゲートボール　農業ができる場所
  釣堀　ゴルフ場　お散歩コース

雇用の拡大
- 茨城県内の医療従事者を優先的に採用

医療・福祉の充実
- 施設利用者の介護を手厚く
- 介護老人施設としての利用も可能

○メリット
- 雇福祉用の拡大で若者を呼べる
- 新たな地域コミュニティの形成
- 資源の有効利用
- 県外からの人の呼び込み
- 地域経済の活性化
- 施設利用者の家族の誘致

○課題
- 資金
- 人の呼び込みのPR方法



あんちゃん　こうちゃん

北茨城市楊枝方地区の活性化

F班　松永・西内・高橋・石渡・中澤・佐藤

今回私たちは、北茨城市楊枝方地区の活性化に取り組み、講義、現地視察を通して、実 際に北茨城市、楊枝方地区の活性化のための案をいくつか考えました。
私たちは案を考えるうえで、まず北茨城市、楊枝方地区の現状と課題について整理しま した。

市の職員の方の話や私たちが実際に訪れてみて、北茨城市、楊枝方地区の現状は、過疎 化が非常に進行しており、少子高齢化の傾向が非常に強い地域であると考えました。それ に伴い学校の統廃合も進んでいます。
北茨城市、楊枝方地区の今後取り組まないといけない課題としては、市内の人口の減少、震災による風評被害、地域外への広報力不足を考えました。これらの課題を考えたうえで 思ったことは、外部に対するアプローチ、外部からの呼び込みが重要ということです。

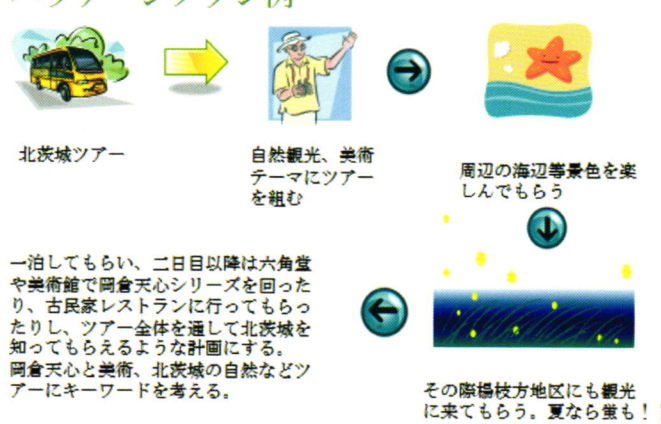
上で外部に対するアプローチ、外部からの呼び込みが重要だと述べましたが、外部から の呼び込みをするうえで、内部的な活性化のさらなる努力も必要だと感じました。そのた め、私たちの班では、北茨城市、楊枝方地区の活性化を内部的な活性化と外部的な活性化 に分けて、それぞれの活性化の案を考えました。

最初に、北茨城市、楊枝方地区の内部的な活性化のための案ですが、楊枝方地区は住民 間の関係が非常に強いということなので、それを今後も維持、さらにはもっと強い関係を 築いてもらい、住民の満足度を高めるとともに、地域活性化に向けて団結していくことを 第一に考えました。住民同士の関係を強めるとともに、外部的な活性化、観光にもつなが る案として民宿の共同運営などを考えました。
次に外部的な活性化の案ですが、まず上でも述べた民宿により、住民との仮家族のよう な体験をしてもらい、土地や人を知り、愛着を持ってもらい、移住を考える人を増やそう と考えました。また、市民農園(クラインガルテン)により、耕作放棄地を有効活用し、北茨 城楊枝方地区への移住を進める案も考えました。問題点としては、イノシシの被害軽減が 必要であることと全国に数多く存在する市民農園との差別化があると考えました。差別化 の1つの案として、海にも近いという立地を生かし、漁業の体験などを組み込んだ、農業 と漁業の連携による市民農園(クラインガルテン)挙げたいと思います。また、第一次産業の 訓練講座を開き、第一次産業の1日体験、専門講座により、第一次産業に興味を持っても らい、上の市民農園(クラインガルテン)の利用増加にもつなげていこうと考えます。

楊枝方地区の活性化とずれてしまうが、北茨城市全体の現在の状態の改善してもらいた いものとして、観光地としての受け入れ態勢の整備を考えました。あるメンバーが実際に 北茨城市に訪れた際、バスの少なさに驚き、都合のいい時間のバスがなかったため、駅から美術館、六角堂といった観光地を歩いて回ったという話をしていました。これを聞きそ の他のメンバーは非常に驚きました。費用対効果といった問題もあると思うが、この現状 は今後観光、地域活性化において、改善すべきと考えました。

最後に、外部的な活性化案の1つとして、私たちでパッケージプランを考えました。テ ーマは自然観光と美術としました。初日は、五浦周辺の海辺、楊枝方の自然、夏の場合は 夜の蛍などを楽しんでもらいます。1 泊してもらい、2 日目以降は六角堂、美術館などの岡 倉天心シリーズを回り、お昼は古民家レストランで楽しんでもらいます。ツアー全体とし て、楊枝方、五浦など北茨城市を知ってもらい、興味を持ってもらうことを目標としました。

パッケージプラン例



茨城県から

単位認定のある長期講座を受け持つという責任感から気合いを入れて準備に臨みました。白紙の状態から講義内容を協議したこともあり、約半年の準備期間を要しました。なるべく教室を飛び出し、地域を肌で感じる機会を多く設けたつもりです。多くの受講生からは、「日常生活の中でも地域の課題に目が向くようになった」という声が聞かれましたが、今回の講座によって、日頃から自分の周りにある問題を発見できる目と地域への好奇心を養っていただけたとしたら幸いです。県としても、職員のスキルアップにつながる機会を与えていただいた大学に感謝しています。北茨城市では、学生のアイデアをふまえた地域活性化策を取りまとめており、地域と大学の連携が一過性で終らないことに期待が膨らみます。改めて、地域は若者の発想力と行動力を求めており、大学・学生は地域のために役立ちたいと思っていることがわかりました。来年度は、より具体的なテーマを選定することで、若者の大胆な発想を引き出しやすくするとともに、地域との新たな出会いを創出する講座にしたいと考えています。

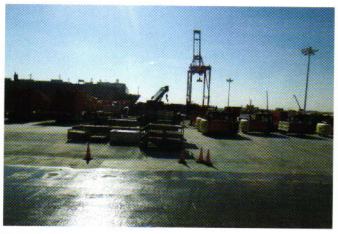
大学から

本授業は、担当してくださった茨城県の職員のみなさま、現地視察先のみなさまのお力、ご協力のおかげで、たいへん充実した内容の授業となりました。また、「地域課題の総合的探求プログラム」の1期生となる2年生たちは、それぞれに意欲的、個性的で、各班のチームワークもよく、彼らの積極性によって、授業は順調に進みました。お世話になりました以下のみなさま、また、そのほか、本授業にご支援、ご協力くださった、たくさんの方たちに、あらためて、感謝いたします。

茨城県　企画部企画課
　　知事公室広報広聴課
　　企画部地域計画課
　　企画部空港対策課
　　商工労働部観光物産課
　　農林水産部農業政策課
　　土木部港湾課
現地視察先
　　茨城港常陸那珂港区　（株）茨城ポートオーソリティ
　　茨城空港
　　農業生産現場　行方市農業振興センター
　　ＪＡなめがた麻生営農センター
北茨城市企画政策課、農林水産課
北茨城市冨士ヶ丘楊枝方地区のみなさま

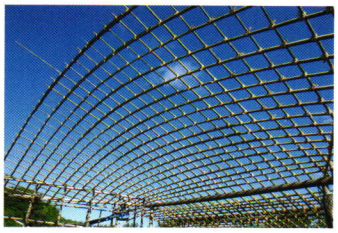
学生たちは、2014年度には3年生になり、前期に「地域課題特論ⅡＡ」を受講します。ＮＰＯや市民団体等で活動されている市民の方たちに講師になっていただき、実際に地域の現場に出て、活動に参加していく予定です。その後、学生たちは、自分たちの発見した地域の課題に、自分たちの力で取り組んでいくことになります。

2014年度には、1年生から3年生まで、学生たちの層も厚くなります。みなさまには、引き続き、本プログラムの学生たちをご指導、激励いただけますよう、お願いいたします。



本授業は、以下のメディア等に、紹介・掲載いただきました

10月28日　茨城新聞
12月14日　ＮＨＫ水戸放送局「ニュースワイド茨城」
12月16日　東京新聞　「いばらき　ひと　物語」
2月5日　週刊『茨城朝日』



地域課題の総合的探求プログラム

担当教員
茨城大学人文学部　井上拓也　西野由希子　兪和　小原規宏

2014年3月31日発行　茨城大学人文学部

連絡・お問い合わせ　茨城大学人文学部　西野研究室　TEL/FAX 029-228-8128 nishino@mx.ibaraki.ac.jp